

【特別講演】

「内視鏡治療技術革新の現状と課題」

講師 佐賀県医療センター好生館

消化器内科 医長 富永 直之

座長 佐賀大学医学部附属病院

光学医療診療部 大野 明博

内視鏡治療は内視鏡機器の進歩や技術革新により、この20年で目覚ましい進化を遂げた。診断の分野ではインジゴカルミンやヨードを散布する以外にも、画像強調機能（NBI, BLI, LCI）やピオクタニン染色を併用して、新規病変を発見する方法や病変を拡大観察して診断する方法が確立した。AIも診断の一翼を担う様になった。治療の分野では病変の大きさと位置にかかわらず、表在性消化管腫瘍の一括切除を可能にする内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）が標準治療として確立した。その治療手技の高度化により、克服すべき出血・穿孔・術後狭窄などの偶発症に対して、様々な治療デバイス、牽引デバイス、術後狭窄予防薬（内服法・注入法）などが考案された。また以前から存在する内視鏡的粘膜切除術（EMR）も、通電せずに切除する方法（Cold snare polypectomy）や水・ジェルに浸水させて切除する方法（Underwater EMR, Gel immersion EMR）など、より安全な治療法も考案された。鎮静の分野も以前より使用されているジアゼパム以外にも、プロポフォールやデクスメトミジンなどの鎮静法も確立した。昨今のコロナウイルス蔓延に伴う感染症対策の分野も、現在早急に対策が検討されている。

それに伴い、医師・看護師・内視鏡技師など内視鏡治療に関わる全てのスタッフに、様々な医療知識や技術が必要となってきた。そこで今回、内視鏡治療の現状と課題を様々な角度から最新のデータも含めて概説する。